医薬品不足 悲惨な行軍

戦後70年 山口の記憶 7

阿知須共立病院会長 三好正之(みよしまさゆき)さん 97

激戦地のニューギニア島 日本の戦没者18万人

太平洋戦争で激戦地の一つとなったニューギニア島は、日本から南に約5000キロ離れた太平洋南部にある。連合軍の優勢な戦力の前に、旧日本軍は制海権、制空権を失い、物資の補給も断たれた。兵士らは敵兵との戦闘だけでなく、飢餓や病気、熱帯地方の過酷な自然環境とも戦わなければならなかった。厚生労働省によると、ニューギニア地域での戦没者（概数）は18万600人に上るが、まだ収容されていない遺骨は多い。島は現在、インドネシアとパプアニューギニアの2か国が領有している。

「食べるものはなく、あらゆる病気が蔓延(まんえん)する中、戦わなければならなかった。筆舌に尽くしがたい悲惨な生活で、地獄と言っていい。医師としての無力さも感じた」

山口市阿知須の阿知須共立病院会長、三好正之さんが太平洋戦争で軍医として従軍した激戦地・ニューギニアでの戦いを振り返った。

三好さんがニューギニアに到着したのは、戦況が厳しさを増した1944年。わずかな食料を携帯し、ジャングルを行軍させられた。軍医ながら軍刀を抜き、米軍との白兵戦も経験。突然、銃を持った敵兵と出くわしたこともある。「10回以上、死んでもおかしくなかった」と、そのとき味わった恐怖を表現する。

医療活動もままならなかった。医薬品が底をつくと、傷ついた兵士たちに施せるのは止血くらい。無線で薬を求めようにも交信できず、マラリアなどにかかった兵士も十分に治療できなかったという。

ゴムの部分がすっかり硬くなった聴診器が今も手元にある。当時、数多くの兵士を診察したものだ。

ニューギニア戦線で持ち続けた聴診器を前に、平和について語る三好さん

出征を前に撮影された三好さん（左から2人目）と親族（三好さん提供）

「これがあれば、心臓がどれくらい悪いか、肺炎、マラリア、デング熱の状態、重傷か、軽傷か、色んなことを調べられた。でも、それくらいしかできなかった。内地に帰るまで、生き延びてほしいとの気持ちを込めて治療し続けた」

三好さんは復員後に開業。80年からは旧阿知須町長を2期務め、きらら浜整備に関わった。そのきらら浜では今夏、各国・地域のボーイスカウトが集う「世界スカウトジャンボリー」が開かれ、被爆地・広島の訪問など平和について学ぶプログラムも行われた。

「戦争を知らない世代が増え、戦争に行ったことがある者の発言力は小さくなった。だが、わしは言うよ」。三好さんはそう語った後、「戦争は、国民を悲惨な生活に追い込み、戦没者の遺族らに痛ましい毎日を送らせる。戦争はしちゃいけん」と力を込めた。

（北川洋平）

店が約10万本を用意するこ
とや、30日には25団体の世界
着けて記念撮影を行った。
祭りは、同市仙崎の青海
村岡知事と県内6町の町
長は18日、県が進めている
地方創生に関し、県は2
015～19年度の施策をま
会もその一環。
各町長からは「定住促進
（田布施町）といった意見
が上がった。